

多様な教育的ニーズに応じた教育実践

～知的障害特別支援学校高等部普通科の

教育課程類型化による実践から見えてくるもの～

千葉県立君津特別支援学校

電話 0439-55-4333

FAX 0439-55-7859



君津特別支援学校

研究のポイント

本校高等部普通学級の教育課程類型化の取組2年目となる。今年度は、それぞれの課程の実践を評価し、生徒一人一人の教育的ニーズに応じた指導内容・方法の在り方を探る。また、学校全体の教育課程の在り方について見直しを図る。

■学校の概要 <http://cms2.chiba-c.ed.jp/kimitsu-sh>

木更津市、君津市、富津市の三市を学区とし、小学部、中学部、高等部と各学部の重度重複障害の児童・生徒の教育課程を編成したみどり部の4つの学部を設置している。今年度5月1日現在、児童・生徒数は小学部79名、中学部36名、高等部97名、みどり部31名（小13名・中7名・高11名）、分教室（小・中）7名、合計250名と適正規模をはるかに超える大所帯で、児童・生徒数の増加による過密化の解消が喫緊の課題となっている。

■研究課題

高等部では、生徒数の増加に伴う障害の多様化に対応した教育課程の編成が課題の一つとしてあげられる。高等部生徒数97名、みどり部（高）11名の一人一人の教育的ニーズに応じた教育課程を編成し、よりよい指導内容・方法を模索する中で、その成果と課題を明らかにする。また、高等部から学校全体への意識改革を図る。

■研究の目的と方法

1 目的

本校高等部の教育課程を類型化し、一人一人の教育的ニーズに応じた指導の充実を図り、その効果や留意点、課題について明らかにする。

2 方法

- (1) 昨年度に引き続き、4つの教育課程（みどり部《高》、A、B、C課程）の実践を行う。
- (2) 学期毎に各課程で実践の評価をし、1年間の成果と課題を明らかにする。
- (3) 次年度に向けて、それぞれの教育課程の更なる改善を図る。

■研究概要

1 成果と課題

(1) 作業学習

「職業自立に向けて、自分の力を精一杯発揮し、主体的に働く意欲や態度を身につける。」ことを目標に取り組んでいる。C課程を編成したことに伴い、A・B課

程の生徒一人一人にあわせた作業工程の見直しを図った。

責任感や主体性が育まれた反面、各作業班の人数配当や新しい作業班の立ち上げの必要性等の課題も明らかとなった。

C課程では「自ら考え、判断して、行動する」という目標を掲げて取り組んできた。一人で完結できる活動を用意することで「責任感」を、日々異なった活動を用意することで「臨機応変さ」を、生徒同士の話し合いの場を多く設定することで「コミュニケーション能力の向上」を図ることができ、大きな成果をあげることができた。評価方法の工夫を図ったことも自分の課題に自ら気づき、主体的な行動を促すことにつながった。

(2) 教科学習

C課程では「社会自立に向けて、卒業後の社会生活に必要な知識や技能を身につける。」ことを目標に取り組んでいる。卒業後の生活に直接結びつくように、ICT機器を活用した授業、生徒同士の話し合いを取り入れた授業を、観点別評価を取り入れながら実践してきた。生徒が主体的に学習に取り組む様子が随所に見られ、考えをまとめたり、発表したりする力がついてきたり、わからないことは自ら進んで調べる習慣もついてきたりなど大きな成果をあげることができた。

(3) 自立活動

精神疾患を抱える生徒に対して、家庭や関係機関との連携を密に図ると共に、週1回校内支援担当職員がカウンセリングを継続的に実施して、生徒の思いに寄り添った丁寧できめ細かい支援を行ってきた。担任との情報交換、学部での共通理解を図ることで、よりよい支援の方法を探っている。このような精神疾患を抱える生徒が今後も増加傾向にあることを踏まえて、さらなる指導支援の充実に取り組む必要性を感じている。

(4) 課程の枠を超えた取組

生徒一人一人の可能性を最大限に伸ばすために一緒に学習した方が効果があると考えられる授業には、課程の枠を超えて、一緒に学習する場を積極的に設定するなど、個々にあわせて柔軟に対応した。このような柔軟な対応ができることが高等部普通科で類型化を図る最大のメリットである。生徒一人一人に応じた教育課程を目指して、さらに生徒一人一人の教育的ニーズに対応した教育課程の編成を模索していきたい。

2 まとめ

- 教育課程を類型化することで、多様な教育的ニーズに応じた教育実践がしやすくなることがわかった。今後も、課程の枠にとらわれることなく、生徒一人一人に応じた教育課程の編成に努力していきたい。

- 生徒の成長を通じて、生徒一人一人の教育的ニーズに応じた教育課程を設定し、個に応じて柔軟に対応することの大切さや重要性を再認識することができた。特に、知的障害軽度の生徒については、作業学習だけでなく、教科学習の充実も図りながら職業自立・社会自立に向けて取り組む必要性があることが分かった。

- 今年度は、高等部にとどまらず、小学部とみどり部（小）で児童の教育的ニーズに応じた教育課程の編成を行うなど、高等部の実践の成果が、少しずつ他学部へと広がりを見せている。今後、さらに、この「多様な教育的ニーズに応じた教育実践」を、全ての学部で取り組み、学校教育目標である「子どもが豊かに育つ教育」を実践し、「世の中を優しくする学校」を創りあげていきたいと考えている。